

歴史文化サロン

れきしぶんかサロン

したかいどう 下街道



下街道本町常夜灯

庶民の街道であった。古く尾張と東濃を結ぶ街道として、古代には大和朝廷と直結する幹線道、日本武尊が東征の帰路この道を通ったとされ、この街道には日本武尊の伝説が多く残されている。当時街道の幅は2間(3.6m)で東海道の半分の幅だが、明治13年(1880年)明治天皇も便利なこの道を行幸されたため街道の整備がされた、歴史ロマンに満ちた街道である。

「下街道」は名古屋市中区錦2丁目の「伝馬会所札の辻」を起点(終点)、北東へ大曾根、春日井市に入り、勝川、鳥居松、坂下、内津を経て多治見市、土岐市、瑞浪市を通り恵那市の「中山道」榎ヶ根に至る延長14里半(約58km)の街道。昭和27年(1952年)に多くの下街道が国道19号線に変わった。多治見市内は内津峠から宿場町の池田町屋、長瀬通(江戸時代は土岐川堤防沿)、多治見橋、本町通を通り神明神社、生田峠に至る。江戸時代に中山道と名古屋城下を結んだ脇住環で、善光寺道、釜戸道、内津道、名古屋道、伊勢道と呼ばれ



多治見国長邸跡



多治見国長公肖像画
(西浦円治が絵師浮田一恵に書かせた)

多治見国長は、美濃国の守護清和源氏の流れをくむ美濃を地盤とする有力御家人の土岐頼貞の同族の土岐源氏で、多治見の地を治めていた武将である。蒙古襲来の文永(1274年)、弘安(1279年)の役があった後、鎌倉幕府が疲弊していたおり後醍醐天皇による討幕の企ての正中の変1324年(正中元年)が起こる。土岐頼貞の十男頼兼よりかねと土岐光定の兄国義の孫である多治見国長が討幕の企てに参加するが、一族の妻の密告で計画が発覚、六波羅探題の軍勢三千余騎に包囲され非業な最期となったと「太平記」に書かれている。「ぎんざ商店街」の一角に残る「多治見国長公遺址」があり、国長の屋敷が西南に100m四方あったといわれている。



多治見国長公邸跡

多治見橋

下街道が通るこの橋は明治初期までは、冬は土橋、夏は渡し舟であった。明治13年(1880年)明治天皇行幸の時、官費で木造橋が架橋されるが、翌年洪水で流され、明治19年(1886年)地元の豪商4代目西浦円治により私財で架橋される。現在のコンクリート橋は昭和12年(1937年)に架橋される。

江戸時代の下街道は土岐川右岸河原・堤防の道で、明治20年(1887年)には長瀬本通り～池田町屋間の内陸を直線で結ぶ道に付替えられ、昭和17年～27年(1952年)は旧国道19号線に変わった。

問い合わせ先

〒507-0037 多治見市吾羽町2 (多治見駅観光案内所内)
多治見観光ボランティアガイド 電話: 0572-24-6460

